

## 会津の歴史シリーズ



## 第11回 会津ゆかりの文化財

中岡 進 (なかおかすすむ)

若松城天守閣郷土博物館  
副館長・学芸員

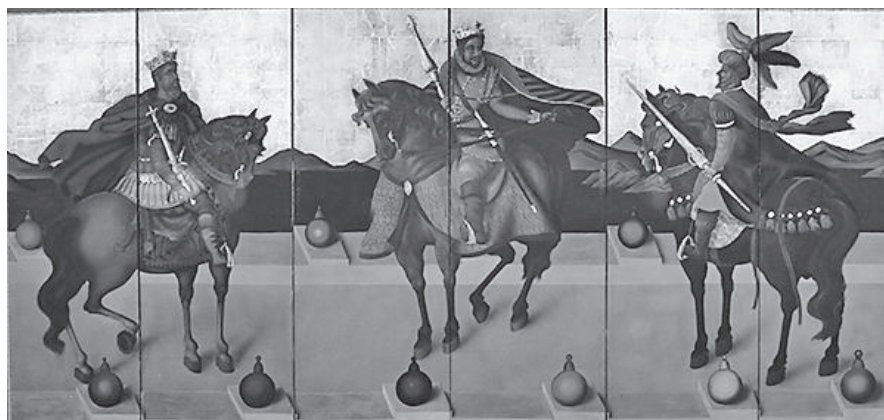


会津には長い歴史の中で、ゆかりの文化財資料も多数あるが、戊辰戦争の敗戦によって散逸してしまった資料も少なくない。そこで今回は会津にゆかりの深い資料2題を紹介してみよう。

「泰西王侯騎馬図屏風」

江戸幕府による鎖国前の我が国における南蛮美術資料の代表作といわれる「泰西王侯騎馬図屏風」は、鶴ヶ城内に秘蔵されていて、戊辰戦争敗戦による開城の際に持ち出されたものである。この屏風絵は、17世紀の初めごろ日本で作成され

たと考えられている。描かれている馬に乗った西洋の王たちは、1608年にヨーロッパで出版された世界地図に描かれており、これを題材に国内で大きな絵画作品に仕立てられたものである。サントリ美術館の解析で、国内産の絵の具を使っていることが判明したため、国内で作成されたことがわかる。しかし屏風としては日本の建造物の室内装飾品としては大きすぎるため、もともと屏風仕立てだったのか、あるいは襖や壁紙として用いられていたのか、そのあたりははっきりしていない。ではなぜ、そしていつごろ会津にもたらされた



泰西王侯騎馬図（静図模本）（会津若松市所蔵）

色使いや構図を変えて写されたもの。作成されたのは明治～昭和初期ごろと思われる。

のであろうか。1603年に徳川家康が江戸に幕府を開くと、徐々にキリスト教や西洋の文物への規制が強化されていった。背景には平等思想のキリスト教の考え方が、幕府による支配の弊害になっていたことと、西洋からの武器が反徳川勢に流入することを恐れたのだらうと思われる。しかし宣教師たちは日本での布教を厳命されていたため、その打開策の一つとして西洋画を日本国内で描かせることで、西洋文化の関心を高めようとしていたのだらう。ではなぜ会津だったのか。当時の会津の城主だった蒲生秀行<sup>がもうひでゆき</sup>は、高名なキリシタン大名の蒲生氏郷<sup>がもうじきょう</sup>の息子で、母がキリシタンに理解のあった織田信長の娘<sup>おだのおなが</sup>、そして妻が將軍である家康の娘だったため、キリスト教庇護を訴えるには最も効果的な人物と思われたのであろう。では、正確にいつごろかの手掛かりはというと、1611年9月にセバスチャン・ビスカイノという宣教師が、会津の秀行を訪ねている記録があるので、おそらくこの時に持参したのではないかと考えられる。しかしこの1か月前、会津は直下型の地震に見舞われ、未曾有の被害にあっていた。おそらく秀行も、ビスカイノへの対応など満足にできない状況にあったと考えられる。(伝来の時期に関しては複数の説あり)

それではどのような状態で持ち込まれたのか。最初から屏風だとすると、日本の建物には不似合いの大きさである。一説には襖絵としてとも言われているが、襖の引き手の金具の部分<sup>が</sup>切り抜かれていない。したがって障壁画として壁に貼ることを目的として持ち込まれたと考えるのが妥当だらう。しかし鶴ヶ城の中にこれを障壁画として用いていた痕跡はない。たぶん、丸めた形で持ち込まれたものがそのまましまわれていたという可能性が高い。ビスカイノ説だとすれば、大地震の被災直後であるためなおさらであらう。

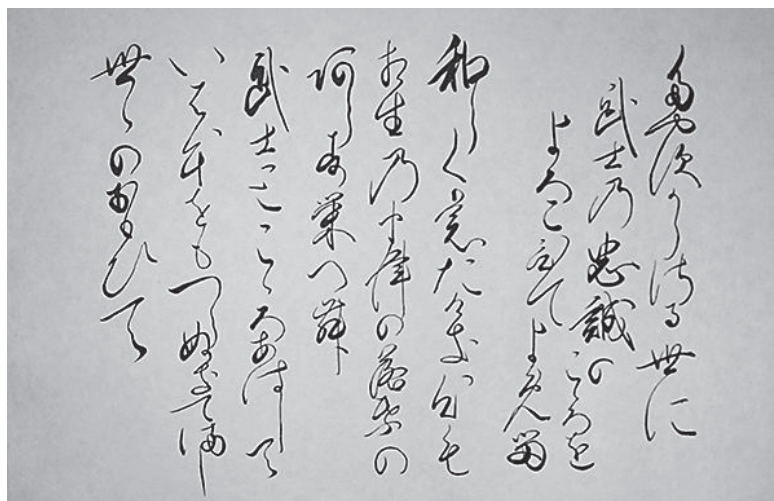
さてこの絵が、戊辰戦争敗戦後、松平容保<sup>まつだいらかたもり</sup>の身の回り品の一部として持ち出されることになる

のだが、なぜ選び出されたのかはわからない。この時はすでに屏風に仕立てられていたと思われるが、通常の屏風より二回りも大きいこの屏風を、限られた持ち出し品の中に含まれるように選んだのは誰だったのか。さらに翌年容保は、永預かりの謹慎処分となり死を免れたため、そのために奔走してくれた長州藩の前原一誠<sup>まえばらいつせい</sup>に片側の「動図」を御礼に贈っている。容保の命を救ってくれたことへのお礼に見合う品だと思われたのか。あるいは前原が望んだのか。南蛮美術に関する研究などなされていない段階で、なぜそれほどの価値があると判断されたのか。そのあたりは解明されていない。ちなみにこの「動図」は現在神戸市立博物館の所蔵資料となっている。

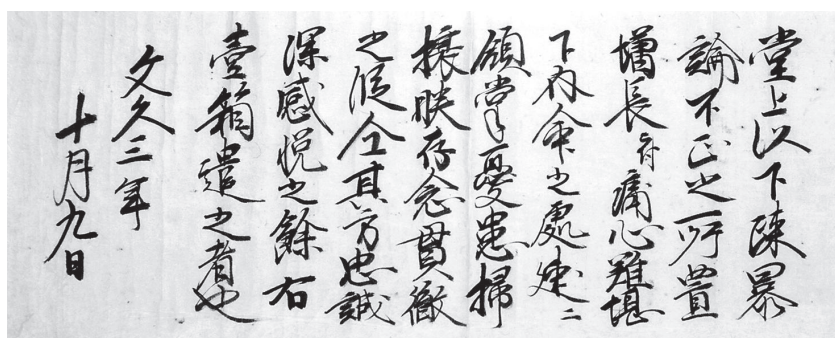
そして「静図」の方は東京へ移り住んだ松平家が所持していて、前当主の故・松平保定氏<sup>まつだいらもりさだ</sup>は幼いころに土蔵に大きくて怖い屏風絵があったことを記憶されていた。しかし太平洋戦争で東京が空襲にあった時(1945年5月28日)に資料を保管していた蔵が被災してしまった。幸いにもこの屏風がけた外れに大きかったため一番奥にしまわれていたので、それほどの被害を受けずに済み、現在はサントリー美術館の所蔵となっている。

### 「御製」「宸翰」

松平容保が京都守護職時代に孝明天皇の意向を受け、京都の長州藩士と、これに与する公家たちを追放(「八・一八の政変」)した。これにより1863年10月9日に容保はひそかに孝明天皇に招かれ、働きを称える<sup>(※1)</sup>御製とそのことを記した<sup>(※2)</sup>宸翰<sup>しんかん</sup>を賜った。孝明天皇は宸翰を多発したことで知られるが、通常は賜ったものを書き写し、原本はお返しするのが一般的だった。しかしこの時のものは、例外的に容保は所持したのだった。そして戊辰戦争がおき、会津藩が敗れるが容保はひそかに持ち続けた。なぜならこれこそが、会津藩が天皇家から厚い信頼を受けていた証であり、



孝明天皇御製（写本）（会津若松市所蔵）



孝明天皇宸翰（写本）（会津若松市所蔵）

上掲2点は、天守閣内での常設展示用に作成されたもの。

賊軍ではないことを明らかにするよりどころとなるからであった。その後20年あまりの時が過ぎて、明治新政府がこの御製・宸翰が現存することを知るところとなり、西園寺公望<sup>さいおん じきんもち</sup>らがこれを買取ろうと画策した記録が残っている。また明治30年代には旧会津藩士<sup>きたはらまさなが</sup>の北原雅長が、孝明天皇から賜ったことを出版した本の中に書いていて、それが原因で不敬罪により警察に捕らえられたこともあった。しかし松平家としては以後も手放すことなく、現在も受け継がれている。

実物の、特に御製の方は厚手の上質な和紙に書かれていて、容易に丸めることができない。幕末期の会津藩の立場を明確に示すものとしてドラマの中などでも登場するが、残念ながら「八重の桜」でも裏側から透けて見えるような紙が使われていた。宸翰には「右一箱を遣わす」と書かれて

いるので、おそらく曲げたり折ったりせずに開いたままの状態に入れておける箱に入れられていたのだろう。しかし会津藩が京都を追われ、江戸から会津へ、さらに戊辰戦争を経て容保の身柄が江戸へと移されるが、ずっと身近に置いておいたに違いない。のちに容保は、この「御製」と「宸翰」の経緯について自らの筆で記録しているが、その中で「一身に離さず」とあり、携帯しやすい竹筒や錦袋に入れて所持したことがわかる。原本には折り曲げた筋が無数にあり、そして上下端には錦袋の両端を結んだときについたであろう、小さなしわができていて、容保の苦難の経緯を物語っている。

（※1）御製：天皇の作った詩歌や和歌

（※2）宸翰：天皇直筆の文書